一宮市博物館　　1988.12

博物館だより

No. 4

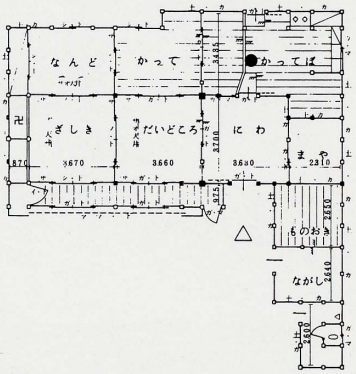
企画展　「台所の主役たち」

―かわりゆく食の道具―

昭和63年12月17日(土)～昭和64年1月29日(日)

雛道具のなかの水屋道具(岐阜市歴史博物館蔵)

▶おかっての位置
(『一宮の民家』より)



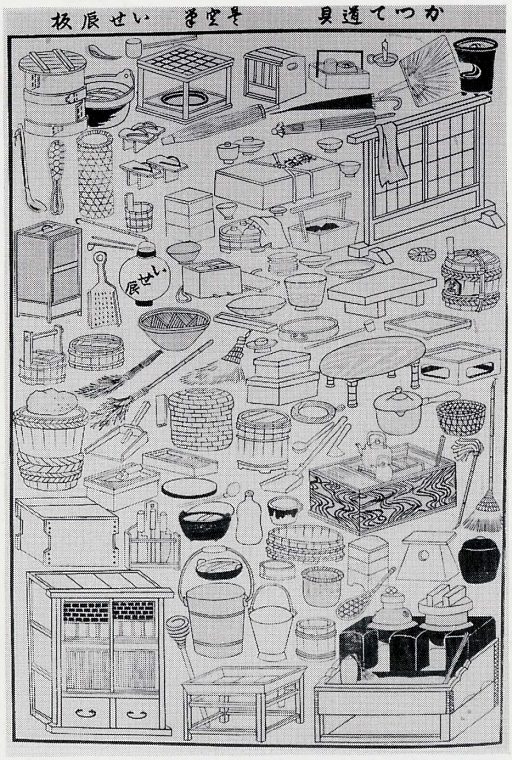
■台所と台所道具

以前の台所は、現在のように水の施設や火の施設が一つの部屋にありませんでした。台所は「おかって」と呼ばれ、屋敷内の土間に設けられていました。また、洗い物などは戸外につくられた「いどば」や「流し」で行われました。

明治時代に描かれた「おもちゃ絵」の中に、おかっての道具を描いた絵があります。クドや半切桶、おろし板、ザルなど台所の必需品が描かれています。この絵から、当時の人々が台所道具を大切にしていたことがよくわかります。

私たちの食生活を支える台所道具は、外国からの影響などでさまざまに改良され、変化してきました。一方、古い道具がすべて消えてしまったわけではなく、ザルやオケなど今もなお生き続けている道具もあります。

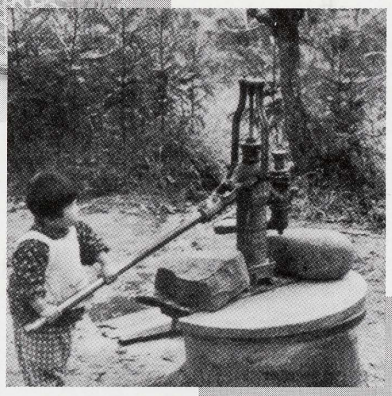
今回の展示は、一宮市内で明治時代から昭和のはじめにかけて使われていた台所道具を紹介し、さらに平野部と山間部の道具を比較していただこうと企画しました。



かって道具（飯沢　匡、広瀬辰五郎著
徳間書店刊『おもちゃ絵』より転写）

流し場

イカキ(ザル)


▶井戸

■水を使う道具

水道が引かれる前は、人々にとって水は貴重なものでした。井戸や泉から汲んで水ガメにためた水をより合理的に使うため、桶やザル（イカキ）、タワシが使われたのです。タワシは、稲わらや縄を束ねたものが使われました。ザルは市内の瀬部で盛んに作られ、売られていました。また、江南市の東野からも売りにきました。旧丹羽・葉栗郡の瀬部、東野、島宮、松竹は木曽川扇状地に位置するため良質な竹を産出し、すでに桃山時代には竹細工が盛んでした。

一宮にはじめて水道が引かれたのは昭和12年のことでした。それまで飲料水、洗い水、風呂の水などは、庭につくられた井戸から汲んでいました。水質が悪くそのままで使えないソブ水は、漉(こ)して使いました。

井戸には井戸神様が宿るとされ、お正月には鏡餅が供えられました。井戸の中にコイやフナを泳がせ、神様として敬っていたところもあります。

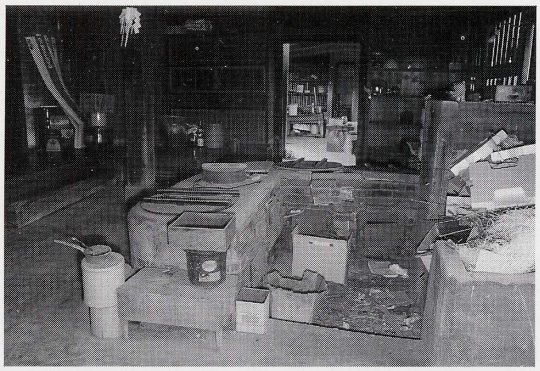
■火を使う道具

一家の火を守るクド（カマド）は台所の主要部分を占め、その管理は主婦の大事な仕事のひとつでした。クドにはクド神様（荒神様）が宿り、現在でも秋葉神社がまつられている地区もあります。

クドには固定式のものと移動式のものがあり、その歴史は古墳時代にまでさかのぼります。もともと土を使って築かれたものが主でしたが、明治時代になるとタイル張りにしたものやレンガ製のものなどが使われ始めました。平野に位置する一宮では、クドの燃料となる薪が不足していました。このため、タキモンと呼ばれるワラ・ムギワラ・桑ボエ・木の枝・アエ束（柴）などを燃料として使っていたのです。また、クドの補助具としてヒチリンやコンロが利用され、戦後はガスや電気を使う製品に変わっていきました。

しかし、現在でも祭りや大勢のお客さんのあるときには、移動式のクドやオオバソリ（鍋の大きいもの）や釜が使われることがあります。

▼移動式のクド


クド

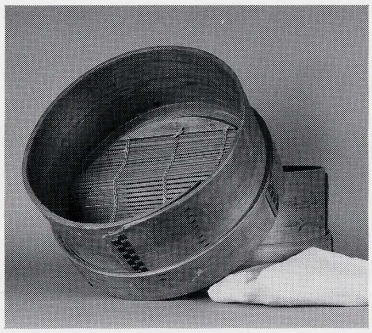
■台所から食卓へ

食卓を囲んで食事をする暮らしが広まったのは、ちゃぶ台が普及した明治の半ば以降のことです。それまでは、ふつう箱膳が使われていました。子供は、クルミ膳という膳の下にクルミを付けたものを使ったりしていました。

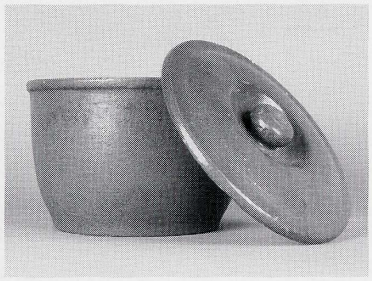
台所で調理されたご飯は、オヒツで食卓まで運ばれました。また、寒くなるとイズミで保温したりしましたが、現在では電子ジャーにとって替わられてしまったのです。

また、祭りのときなどは、煮物やまんじゅうをキリダメや重箱に入れて、お客さんをもてなしました。キリダメは三重県伊勢市宇治山田製のものが、主に市内で利用されていたようです。

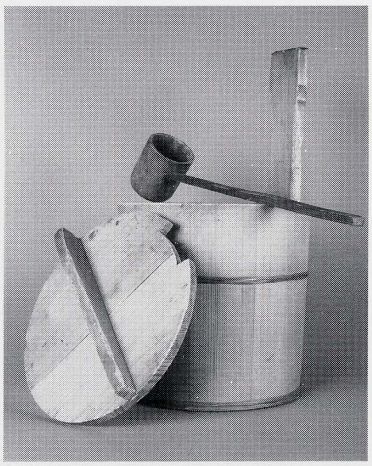
ホウロク・ゴマイリ・タマゴヤキキ



曲物のセイロ



漬けもの用カメ



シルチョーケ
（汁桶）

■調理する

煮る、炊（た）く、煎（い）るというのは、火を使う代表的な調理方法です。材料を切る、つぶす、粉にする、練る、ふるうといった下ごしらえをして鍋、釜を使って調理します。調理は、食べ物を食べやすくしてくれます。

◆煮る　もともと、私たちの祖先は煮て食べることを主としていました。最初の調理具である土器はその後鉄の鍋に、明治時代にはブリキやホーロー製の鍋が改良され、戦後は加工し易く軽量なアルミ製のものが普及しました。

◆蒸す　強飯（こわいい）、餅米、饅頭、芋、味噌豆などを蒸すために使うセイロには、曲物でできたもの、角形で組木のもの、桶でできたものがあります。一宮では主に曲物と組木のセイロが使われていたようです。

◆煎（い）る　現在煎るものと言えば、ごまやコーヒー豆ぐらいになってしまいました。しかし、以前は味噌や糖を作る豆、麦などはホウロクを使って煎りました。素焼の土器で作られたホウロクは、現在でも愛知県高浜市でつくられています。

その他、すり鉢を使って作るあえもの、こね鉢で作るうどんや団子は台所でよく作られる料理の一つです。調理具の増加は、わたしたちの食事のバラエティをも増やしてきたのです。

■たくわえる

新鮮な食料がいつでも手に入るわけではありません。食料を保存するためにさまざまな工夫がされました。桶やカメで作られる漬けものなどの保存食もその一つです。桶は市内の桶屋さんで作られましたが、カメは常滑から木曽川、日光川を船で運ばれてきました。そのほか大根や芋などは冷たい伊吹おろしを利用し、乾燥して貯えられました。

調味料の代表格である味噌やしょう油（たまり）も、昭和の初期まではこうじを共同でつくり各家で貯えていました。

明治時代以降、日常的な飲酒の習慣が広まると、酒屋から清酒を購入する道具として貧乏徳利が使われました。ガラス瓶が普及する前はしょう油やみりんを入れる瓶も陶製のものでした。

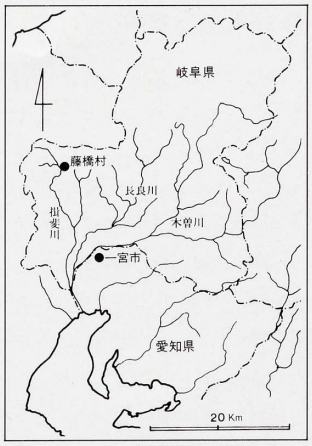
昭和に入り氷を使う冷蔵庫ができ、戦後、電気冷蔵庫が普及してからわたしたちの食生活はずいぶん変わってきたと言えます。

■山の台所

今回、山の台所道具として紹介した資料は、岐阜県揖斐郡藤橋村で使われていたものです。藤橋村は美濃の北西部に位置し、その周囲は1000メートルを越す越美山地に囲まれています。

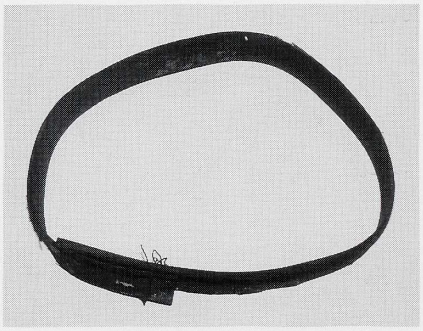
ここではクズ、ワラビ、トチ、フキ、ゼンマイなどの植物が豊富で、これらを調理する道具が発達しています。

山間部の台所道具をみると、木でできた道具が多いことに気づきます。コネバチ、食器、ザル、カゴ。また、火を使う道具はクドではなく囲炉裏を主に使います。囲炉裏は調理するためだけでなく、暖をとるためにも使われます。さらに、平野部では天日干しにする食料も囲炉裏の上に作られた火棚で燻製にしたり、貯蔵したりします。



藤橋村の位置

カゴやザルはもともと木を割(さ)いて作られていましたし、こね鉢も最初から陶器を使っていたわけではありません。木材の不足や簡便さから、竹や陶器などの素材に変わってしまいました。

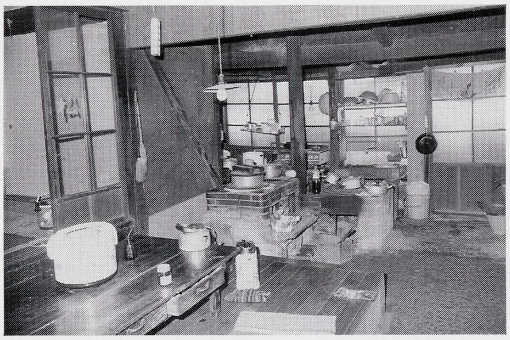


▲ナベシキとマタタビ製のカゴ

■今の台所道具

「主婦の知恵」から「売る側の知恵」へと変わりつつある今の台所道具。道具の素材の多様化やその色彩に目を奪われます。一方、竹製のザルや曲物(まげもの)のセイロがなくなってしまったわけでなく、数は少ないものの依然店先に置かれているのです。今後、台所道具は用途に応じ素材を活(い)かしたものに変わっていくでしょう。

いろいろな道具を柔軟に取り入れてしまう日本の台所は、食事の変化とともに多様化し道具の種類がますます増えていくでしょう。しかし、昔ながらの道具たちも生き続けて欲しいものです。


おかってば

参考文献

飯沢　匡、広瀬辰五郎『おもちゃ絵』1974　徳間書店
栄久庵憲司『台所道具の歴史』1976　柴田書店
神崎則武　『台所用具は語る』1984　筑摩書房
宮本馨太郎『めし・みそ・はし・わん』1973　岩崎美術社
山口昌伴　『図説台所道具の歴史』1978　柴田書店
藤橋村村史編集委員会『藤橋村史』1982
一宮市教育委員会『一宮の民俗』1975
一宮市教育委員会『一宮の民家』1979

謝　　辞

本展を開催するにあたり、ご出品者の他に次の方々にご協力いただきました。ここに厚くお礼申し上げます。
上原泰子　岡本信也　唐松健夫　川村力男　神崎則武　佐藤漣　中川槙雄　日比野光敏　脇田雅彦　脇田節子　渡辺誠　味の素食文化史料室　岩倉市教育委員会　岐阜市歴史博物館　㈱東急ハンズアネックス　藤橋村教育委員会　名城大学建築史研究室

（50音順　敬称略）

◀今の台所道具売り場

資料紹介

―一宮市萩原町の地機の機台―

一宮市萩原町中島　魚住智昌氏 寄贈

当館には、水野正秋氏のご尽力により市内萩原町で発見された地機の腰桁の一部が残っています。腰桁の長さは約160㎝で、高さは約67㎝です。機の長さは約154㎝です。これは、西日本にひろく分布する傾斜型のもので、製作時のチョウナの跡が鮮明に残っています。

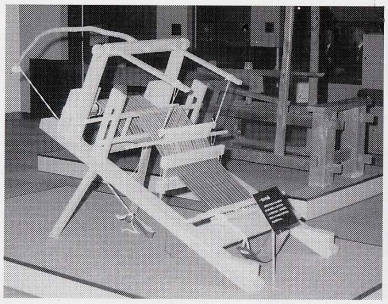
傾斜型の地機は、古墳時代に日本列島に伝わったのではないかとされています。

この地機は、一宮周辺で各家庭の布を織る機として明治時代のはじめごろまで使われていたようです。江戸時代中期から一宮では木綿栽培が盛んになり、高機が普及します。それとともに能率の悪い地機は、姿を消してしまいました。

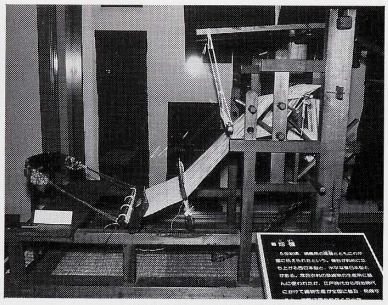
萩原町の魚住つるゑさんのお話では、地機はトトンキーというリズムで、高機はチャコロンチャコロンというリズムで織られたと言うことです。

この地機は現在復原され、博物館に保管されています。また、比較資料として、新潟県山熊田町で使われていた水平型の地機を展示しています。これは、おもに東日本で広く使用されていたタイプのものです。

地機の腰桁の一部



復元された地機



新潟県山熊田町の地機

参考文献

三瓶孝子　『日本機業史』　1961　雄山閣

博物館日誌（抄）

（63．4．1～63．9．30）

4.28～5.22　春季特別展　「美人画にみる繊維の手仕事 ―蚕織錦絵―」

5.8　講演会「絹の魅力と特性」
講師　前東京農工大学工学部付属繊維博物館館長　北村　愛夫氏

5.15　映画会「風俗画 ―近世初期―」「元禄文化」

5.22　講演会「よみがえるシルク」
講師　愛知の産業遺跡・遺物調査保存研究会事務局長　石田　正治氏

6.4～7.17　第1回収蔵品展

7.23～8.28　企画展「これが縄文土器だ」

7.31　映画会「縄文時代」「市政ニュース」

8.7　講演会「縄文の王国 ―信州の縄文中期土器をめぐって ―」
講師　前長野県埋蔵文化財センター調査部長　樋口　昇一氏

8.21　講演会「縄文土器と食べ物」
講師　名古屋大学助教授　渡辺　誠氏

9.10～10.10　企画展「有隣舎をめぐる人々 ―森春濤とゆかりの詩人展」

10.2　講演会「有隣舎と森春濤」
講師　一宮市文化財保護審議会委員　後藤　利光氏

博物館入館状況

月	開館日数	一　般	高・大生	小・中生	計
4	25	1,982	93	1,442	3,517
5	25	2,808	95	2,017	4,920
6	26	1,434	115	446	1,995
7	27	1,365	123	719	2,207
8	26	1,841	174	949	2,964
9	24	1,287	35	426	1,748
計	153	10,717	635	5,999	17,351

特別展、企画展開催期間中の入館者数

- 春季特別展「美人画にみる繊維の手仕事
  ―蚕織錦絵―」
  （4月28日～5月22日）　5,037人
- 第一回収蔵品展
  （6月4日～7月17日）　2,848人
- 企画展「これが縄文土器だ」
  （7月23日～8月28日）　3,862人
- 企画展「有隣舎をめぐる人々 ―森春濤とゆかりの詩人展」
  （9月10日～10月10日）　2,377人

団体観覧一覧

（昭和63年4月～9月敬称略）

【4月】奥町婦人会、一正会、八町子供会、貴船婦人会、富士小6年生、萩原小4年生、柳戸町子供会、丹陽小4年生、大和南小教職員、大和西小5年生、末広小3年生、丹陽南小5・6年生、たまゆら会　**【5月】**刈安賀橋向子供会、戸塚第6つくし子供会、城崎6・7子供会、末広第一子供会、今伊勢郷東子供会、氏永子供会、於保子供会、戸塚第一つくし子供会、今伊勢宮後子供会、北高井子供会、沼津市役所建築課、加納馬場婦人会、大和南小3・4年生、大和西小6年生、葉栗中2年生、岩倉市婦人会、三重郷土会、今伊勢みどり子供会、大和中同窓会、浅井・貴船民生委員会、今伊勢西小教職員、ボーイスカウト第12団カブ隊、今伊勢宮後第2子供会、貴船小6年生、今伊勢連区民生委員会、一宮市文化財めぐり、木曽川町東割田婦人会、印田杉の子子供会　**【6月】**土居婦人会、愛工大建築学科、大和南小6年生、東海社会科研究協議会、大日比野老人クラブ、中島文化財委員会、日進町教委、尾張部社会科担当教職員、真清田マスミ会　**【7月】**東海民具学会、尾張水道事務所、建築士会西濃支部同好会、ボーイスカウト一宮第5団、椙山学園中2年生、佐野郷愛会、神戸大学工学部、稲沢小池南子供会、一宮市親子施設めぐり、平和町新開子供会　**【8月】**愛知県工業高校建築部会教職員、一宮市社会科研究会、社会福祉協議会浅井支部会、ＵＳＡポモナ市コンサートバンド、県営繕業務連絡協議会、花池ジャンボ子供会　**【9月】**農業改良普及事務所長会、北部中ＰＴＡ、伊藤宗栄社中、瀬部小2年生、西成中女子バスケット部、職業訓練センター造園部、浅井保育園母の会、愛知県郷友連盟、尾張12市選挙事務研究会

催し物のご案内

◎ 講演会

と　き：~~昭和64~~平成1年1月22日(日)　1時30分から
ところ：講座室
テーマ：「食の道具のうつりかわり」
講　師：一宮市文化財保護審議会委員
　　脇田　雅彦氏

◎ 映画会

と　き：~~昭和64~~平成1年1月15日(日)　午前11時・午後2時
ところ：講座室
テーマ：「豆腐見聞録」「和菓子」

◎ 展示説明会

と　き：~~昭和64~~平成1年1月8日(日)　午後2時

これからの展覧会のご案内

◎「村の飾り馬具」

会　期：~~昭和64~~平成1年3月4日(土)～4月2日(日)
ところ：特別展示室
内　容：かつては桃花祭をはじめ尾張・西三河地方で広く行われていた献馬の風習も最近では数少なくなりました。本展では、次第に失われていく飾り馬具を、市域の資料を中心に紹介します。

利　用　案　内

開館時間

午前9:30～午後5:00
（入館は午後4:30まで）

常設観覧料

区分＼個人・団体	個　人	20人以上の団体
一　般	200円	160円
高・大	100円	80円
小・中	50円	40円

（1人1回）

休館日

- 毎週月曜日
  （ただし、休日にあたる場合は翌日を休館）
- 休日の翌日
  （ただし、日曜日又は休日の場合は開館）
- 年末・年始
  （12月28日→1月4日）

名鉄電車「妙興寺駅」下車徒歩5分

一宮市博物館だより　第4号

昭和63年12月17日

編集・発行　一宮市博物館
〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地
Tel 0586－46－3215
Fax 0586－46－3216